

編集後記

「症例報告の勧め」

最近の本誌への投稿論文数は減少したままで増加する兆しはみられない。いくら投稿を呼びかけても、誰でも優れた研究は英文論文として海外のimpact factorの高い雑誌に投稿したいと思うのは当然である。

ならば本誌の存在意義は何なのか？ 私はぜひ本誌を症例報告の発表の場として活用していただきたいと考えている。近年、海外の一流誌の多くは原則として症例報告を採用しなくなった。他の英文誌で症例報告を採用しているところでも、採用率はきわめて低い。和文誌でも症例報告のハードルが少しずつ高くなってきている。

臨床医は自分にとって初めての疾患にあたった時には教科書や論文を読んで勉強する。珍しい症例、特異な病態、新しい診断法・治療法などを経験した時には、特に念入りに調べたり、深く考察したりする。しかし残念ながら、時間がたつとその記憶があやしくなってしまう。

貴重な症例を発表することは、個人の経験を学会・社会に還元し共有することであり、これは医師・科学者としての責務である。また論文作成を通じて自分の経験・知識・思考の整理を行うことになり、その症例の詳細をいつまでも忘れなくなる。症例の経験の価値を何倍にも高めることができる。科学的思考など臨床能力のトレーニングとしても有用である。

症例報告の論文を書くことはそれほど大変なことではない。多くの臨床医は学会・研究会で症例報告を発表したことがあると思う。その発表の口演原稿を、少しだけ手直しすればよい。緒言（背景）・症例・考察と項目立てて、「です・ます」を「だ・である」に直し、そして考察を少し膨らませる。これで、もう立派な論文だ。

最初は自分の臨床能力の向上を目的に始めた研究・論文作成も、必ず科学・社会の発展に貢献することになる。ぜひ熱意にあふれた論文の投稿を期待している。

(M.S.)

編集委員

(長) 岡 島 康 友

井 本 滋 川 村 治 子 小 林 富美恵

杉 山 政 則 照 屋 浩 司 松 村 讓 兒

森 田 耕 司 楊 國 昌 吉 野 秀 朗

杏林医学会雑誌 第46巻 第4号

URL : <http://plaza.umin.ac.jp/~kyorinms/>

平成27年12月31日発行

編集人 岡 島 康 友

発行所 杏 林 医 学 会

東京都三鷹市新川6-20-2

杏林大学 医学図書館内